

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	假寐：文苑
Author(s)	圭堂生
Citation	龍南會雜誌， 9 3： 3 5 - 4 4
Issue date	1902-07-01
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5348
Right	

き。愚ふに獨斷に亘りて笑を播くべき點は果に二三に止らざるべし諒焉。地方政治の紊亂を論せし點は頗る繁雜の嫌ありと雖も文中云へるが如く租税の根本は此點にあれば繁を厭はずして此に及べり全部分立論の根據たる柴野彥助上書及徂徠の政談は共に著者が當時の將軍の閱覽に供せしものにて、元より彼等が責任を帯びて起草せるものなれば、事實の誤比較的に少かるべしと信じてこれを引用する事となしたり。

參考書の重なるものは、國史眼、陽春廬雜考、田園賴說、地方薄穗集、地方凡例錄、二千五百年史、大日本貨弊志、等なりとす。

文苑

假寐

圭 堂 生

生涯の進路を動かし、偕は一命をも左右する程の容易ならぬ事變でも、吾人には唯其の一端丈しか見ぬのである。まして其他の數限りもない小事變に至つては、近く身邊に簇生すれども、大抵は是といふ結果も生ぜぬのみか、多くは影すらも見せず過ぎ去るものである。が、吾人にして若し

刻々に移り行く自己の運命を悉く知了することが出来たら、此世は希望と懸念と歡喜と失意とに充ちて、少時くも心の休まる時は無からうと思ふ。太伯が人知らぬ一日の歴史は、庶幾くは以て此の消息を明かにするに足らう。

彼の前半生は茲に之を説くのがない。准彼はニウ、ハムプシアの産で、生れも賤しからず、普通の教育をも受けたる上、更にギルマントン中學にて一ヶ年の間古文學を研修した、青春二十の好少年なることを云へば善いのである。其の叔父なる人はポストン府のさゝやかなる八百屋であるが、今度彼を其店に引き取りたいといふので、儲こそ太伯は桑梓の地を發して、大道を、ポストンへと辿り行くのである。

夏の日の早朝から、やがて正午頃迄も歩いて、身に疲れを覺ゆる上、暑さも次第に増して來るので然るべき樹蔭もあつたら、驛馬車を待ちかてら、暫時く腰を下さうと考へたが、謂はゞ彼が爲めと云ふべき一叢の小さな楓の林が見えた。其の眞中は心床しい幽境を形つて、一脉の靈泉、混々として絶えず湧き出て居る。之も偏へに我が爲めに沸くかと思はれて、太伯は其の渴いて居る唇を以て、數度び之を接吻した。既に誰かゞ口を觸れたとも、また觸れぬとも、そんな事を考ふるの暇はなかつたのである。此に於て木綿縞の風呂敷に包んだ二三枚の襦衣と一着のズボンとを假りの枕として、身を岸邊に投じた。日の光りも其身に及ばず、嚴しい昨日の雨で大道もまだ塵を揚げぬ。身に藉ける緑りの床は、毬毛ひたけのそれにも増して、若い男には却つて相應しう見ゆるのであつた。傍りには泉聲懶げにつぶやき、仰げば樹枝夢の如く碧空に戦いで、人をして坐ろに眠りを思はしむる。睡魔は強く彼が身を襲う前、恐くは如何なる夢を見たかをも覺ぬ迄に。併し茲には彼が夢に入ら

なかつた事を述べる。

彼が前後も知らずに樹蔭に眠つて居るに似ず、世の人々は或は徒歩^{かり}から、或は馬上から、或は様々の乗物から、炎々焼くが如き道を傳うて、其の傍りを往來して居る。或者は面も振らなかつた。或者はチラと其方を一瞥したが、忙はしさに紛れて、さる人ありとも氣付かなかつた。又或者は馬鹿に快く眠つて居ると笑つて行つた。偕又侮蔑の念溢れんとして居る多數の輩は、容赦なく其の毒々しき餘沫を彼が身に振りかけた。年増の寡婦ははどりに人なきを見て、ソツと森の中を覗つたが、實に美しひ寢顔であると云つた。又彼を見た一人の禁酒演説家は、亂酔の怖るべき一例として、可憐の太伯を其夜の講話の料とした。併し誹謗も讚辭も笑語も侮蔑も冷淡も、太伯に取つては、凡て同一で寧ろ無いものに異りはなかつた。

彼が眠つてから、ヤット二三分間も經つたかと思ふ頃、逞しい二頭の馬をつけた、褐色の馬車一輛、此方を指して嘩々と驅けて來たが、太伯の寢て居る場所の少し手前で、ハタと立止つた。轡が脱けて、車輪の一つが落ちかけたのであつた。が、損じは意外に輕くて、此馬車でボストンへ歸らうとして居た、稍々年の行つた紳商夫婦が、しばしの吃驚^{おどろき}をかうたに過ぎなかつた。馭者と馬丁とは車を修覆^{なを}しかゝつたから、其の間兩人は相携へて木蔭へ這入つたが、圖らずも彼の感角沸たる泉と、其の岸に眠つて居る太伯とを認めた。一体誰に限らず眠つて居る時分には見る人をして一種嚴肅の威を起さしむるもので、紳士も強く此の威に撃たれてか、痛風に惱んでゐる歩みを輕やかにくど運んだ。夫人も亦俄に彼の目が覺むる恐れがあるので、絹の上衣の歩に隨つてサラ々々と音せぬやうにと心を配つた。老紳士は密語いた。

マ―何と善く眠つたものだらう、スーツとやつて居るアノ呼吸の安らかに深いこと。魔酔劑を用ゐずして、かやうに眠れるものならば、歳入の半ば以上を擲つに躊躇はせぬ。畢竟之は健康で心配のない証據であるから。

夫人は云うた。

たとひ身体は達者であつても、年が寄つてはかやうに眠れるものではありませぬ。老人と若い者の眠り加減は、大した違ひですもの。

路傍の樹蔭は、高價なる紋緞子の帳を垂れた、其の隠れ家であつて、身は靜かに其の帳下に寐て居るかのやうな、此の見も知らぬ少年を、老人夫婦はつく／＼と視て居たが、見れば見る程益す氣に懸る心地がした。折りしも木の間を洩る一條の光りが、下りて其の顔を照すを認めて、夫人は之を礙げんが爲めに、一つの枝を振り曲げやうと力めた。此の些細な惠みを施して後は、さながらに身は其の母でもあるかのやうに覺れたのである。夫人は其の夫に囁いた。

従兄の悴の標的が外れたものだから、神様が茲に此子供を置いて、私共をこちらへ導ひて下さつたやうに思はれます。ドーも妾には亡くなつたヘンリーに似た所があるやうな氣がします。如何でしやうか、起しましては。

夫は躊躇ひながら答へた、

起してドーするのだ、全く其の人柄も知らずに居ながら。

夫人は云うた。

アノ底意のない顔付。この罪のない眠り様。

聲は等しくヒツ／＼として居たが、情意は篤かつた。」

此間太伯の脉膊は昂くもならず、其の呼吸もハヅムことなく、して、其の顔には少しも感動の徴候が見えなかつた。嗚呼幸運は今彼が上に臨んで、將に黄金の負擔を下さうとして居たのである。此の老紳商は其の獨り子を哭して後、其の富を譲るべき遠い親類が一人居たが、其の行動に對して、慊らぬ所があつたのである。かゝる場合に在りては、動もすると人は他人の意表に出づるやうな不思議をもやるもので、貧窮に眠れる青年を榮華に喚び覺すこと、決して珍らしくない。

夫人は勧め貌に繰返した。

起しては如何でしやうか。

此時、背後から馬丁の聲がした。

御兩人共、用意はモ―出來ました。

二人は驚いて起つた。其の拍子に顔が赤くなつた。

さて今迄は多分笑ふべき一場の夢を見て居たであらう、と互に訝り合つて、急いで此處を立去つた。紳士は馬車に身を投じて、不遇なる商業家の爲に、壯大なる慈善院を設立しやうとの計畫に耽つた。太伯は猶ほ快く睡つて居る。

彼馬車がまた二哩とも行かぬ中、活潑な步調を以て、一人の可憐なる小女が來かかつた。此の步調は確に其の小さき心が、如何に胸中に在つて踊つて居るかを示して居る。靴下の紐――何も、言つても差支はあるまい――の解けたのも、恐くば此の愉快なる舉動の爲す所であつたらしい。小女は、絹――であつたか之も善くは分らねが――の紐の弛んで居るに氣注いて、木蔭に立寄つたが、圖

らずも岸の邊りに眠つて居る、一個の青年を認めた。猥りに紳士の寢間を冒すさへあるに、ましてかやうな事で立入つたのであるから、いかなる薔薇もよも之には勝るまいと思ふ程、花顏一時に紅を潮して、ツマ立ながら、ソツと木蔭を逃げ出さうとした。が、眠れる人の傍には、容易ならぬ危険がつて存した。即ち極めて大きな一つの蜜蜂が、ブズブズと鳴きながら、頭の上をウロついて居るのであつた。或は木の葉の間に入り或は日光の漏るる中を、ヒラヒラと飛んで居たが、やがて小暗き木蔭に没して、終に太伯の睫毛の上に止らうとする様子であつた。此蜂の毒は劇しいもので、ドーかすると命にもかゝる。

無邪氣であると同時に、慈悲あるなまけ少女の、何で之を見過さう。直に手巾を揮うて此の敵に衝り、右に馳せ左に馳せて、全く之を木蔭から逐ひ出した。

誠に是れ趣きある一幅の畫。

吐く息もせはしう、面は更に赤うなつて、此の慈悲ある行ひを仕遂げた後、其の爲めに今迄空中の惡龍と闘つて居た、此の見も知らぬ青年を、少女は竊に偷み見た。

立派である

と彼女は考へたが、紅顏は更に一段の紅を添へた。何が故に至福なる太伯の夢は破れて、其の幻影中に此の少女を認むることが出来なかつたか。少くも何を以て全く其の顔の上には歡迎の微笑が輝かなかつたか。趣きある古代の思想によれば、女の魂は、もと男の魂から分れたものだ云ふが、其の少女が今現に來て居たのである。漠たるされど切なる願ひを以て、豫て逢ひたいと熱望して居た、其の少女は今現に來て居るのではあつた。偽りなき愛情を以て、彼は獨り此の少女のみを愛す

ることが出来、彼女も亦獨り彼のみを、其の心の奥深くしひることが出来た、其の少女の姿は、彼が億りの泉の中に、羞を含むで微に映つて居たのである。嗚呼此の影にして一たび消え失せたら、その幸福なる光輝は、復と再び彼が生涯を照すことはないに違いない。

小女は泣いた。

よく眠つて御出でたこと。

斯くて彼女は此處を立つて大道に出たが、來た時と引かへて歩みは かつた。

小女の父は此邊りの富裕なる商人で、此時丁度太伯の様な青年を探して居た。で若し太伯にして此小女と路傍一片の交誼を結んだならば、彼は其父の手代となりて、其他のもの自ら推すべきものがあつたであらう。

斯くの如く茲に復び幸運は近づいた。幸運中最善の幸運は、其の上衣を以て彼が身を拂ふ計りに近寄つて來たのであつた。しかし彼は何事の起つたか、少しも知らない。

小女の姿が見えなくなるかならぬに、二人の男がこの木蔭に立寄つた。二人共顔の色淺黒く、布の帽子を著けて、しかも其帽子は斜めに額の所迄引下げて居る。其衣服は襪襦てはるるが尙ほ昔しの顔顔が見えぬではない。之を誰かと云ふと、常に善からぬ事をのみして世を送つてをる、此邊の惡黨で、次ぎに得べき共同の獲物を賭けて、仕事の隙に、此の木蔭で骨牌を演らうといふのであつた。然るに、太伯が、泉の傍に寝て居るのを見て、一人の惡黨は、其の相棒に呟いた。

オイ、アノ枕にして居る包みを見ないか。

他の惡黨は黙頭いて目配せをした。そして斜めに太伯を見た。

始めの奴が云つた。

此二才奴、襯衣の中に紙入を持つて居るのだ。五六十錢は隠して居るに違ひない。そして若し襯衣の中に無けりや、ズボンの衣囊に在る、が、ツイ目を覺ましたら、ドーする。

と他の奴が云つた。

甲は身に着けた胴衣をハチ脱けて七首の欄を示して。そして黙頭いた。

それだ、それだ。

と乙は低聲こゑにていつた。

二人は生体もあい太伯の側に寄つた。一人が七首の尖を太伯が胸の邊りに突き付けてゐる間に、今一人はろの頭の下に在る包みをさがしにかゝつた。皺の寄つた怕しい二つの顔は、罪と恐れとの爲めに幽靈のやうになつて太伯の上に俯いた。その凄いことは、若し太伯にして此時急に目が覺めたら、屹度惡魔と取違へたに違ひない。ソーだ、これ等の惡黨自身でも、若し側の泉の中を一瞥したら、恐くは之が自分の影だとは認めなかつたであらう。併し太伯は、其容良に、此上もない和ぎを示してをる。恐らく母の懷裡ごころに在りても、かう迄穩かに眠つたことはまだあるまい。

一人は呟いた。

では包を取るぞ。

他は低言にて云うた。

よし、動いたら突く。

丁度此時、一匹の犬が地を蹠きながら此の木蔭に這入つて來て、代り越しに此等の惡黨を眺め、次に太伯を眺め、終に清水を飲みはじめた。

一人が言つた。

チヨツ、モ一駄目だ、スグ後から犬の主が來るに違なひ。

他は言つた。

仕方がない、水を飲ましてやれ。

七首を持つてゐた男は、之を懷中に納めて、更に一挺のピストルを引き出した、が、之は轟然たる一發によりて人命を落す底のものに非ずして、何ぞ圖らん一陶の酒であつて。大きな錫の盃がネジになつて其口に附いてゐた。二人は獻酬時を移して居たが、終に何喰はぬ顔で、笑ひ興しながら此處を去つた。彼等は久しからずして此事を忘れて仕舞つた。素より天使ありて、人としてあるまじき殺人の罪を永遠不滅の簡冊に書き止めたことには、一たびも思ひを致さずに。太伯は相變らず靜かに眠つてゐる。彼の上に臨んだ死の影、其の影が消えて新らしく得た生命の光り、之に付いて、彼は何の知る所もなかつた。

彼は眠つてゐたけれども、モ一始め程に靜かではなかつた。一時間の休息は、以て數時間の勞働から生じた疲憊を、其の強壯なる身軀から拉し去つた。今彼は動いた——次の無言の儘、唇を動かし、次に夢中に現はれた妖精に、何か口の内で話した——終に車の響きが大道に沿うて次第に高く聞えて、消えかかつてゐる太伯が假睡の霧を衝き破つた——そして驛馬車が來た。太伯は我に歸つて驟然として起ち上つた。

オイ、乗して呉れないか

と彼は叫んだ

頂層が明いてゐます

と馭者が答へた。

太伯は乗つた。幾多夢の如き變遷があつたこの泉に、別離の一瞥だも與へずに、快くポストンの方へ走らした。彼は富の幻影がこの水面に黄金の色を落したことを知らなかつた——又愛の幻影が嗚咽する水に向つて低く嘆息したことも知らなかつた——又死の幻影が彼の血を以て満岸を紅化せんと迫つたことも知らなかつた——暫時彼が眠つてをる間に起つた事は一切之を知らなかつたのである。

眠れる間も然らざる間も、要するに吾人は將に起らんとする事物の覺音を臆けながらも聞かぬのである。併し、たとひ見るべからず、又豫め期すべからざる事變が、絶えず吾人の行路を横ぎつて居るにもせよ、道德界に於て、聊かなりとも先見の功を奏せしむるに充分なる齊一といふものがあるのは、是れ正に上帝攝理の存在を証するものではあるまいか。

往年國民之友紙上にて晝寢と題して故の思軒居士の譯出せられしもの即ち此編なり。